

第128回 岡山外科会

日 時：平成7年10月14日(土) 13時より

場 所：岡山国際交流センター国際会議場 (2階)

会 長：谷 崎 眞 行

(平成7年10月31日受稿)

1. 日本人の稀な血液型 Jr(a-) の救急開頭症例

水島中央病院脳神経外科 秋岡達郎 市川智継 白川武志

開放性頭蓋陥没骨折の緊急開頭術時、事前の血液交叉適合試験でスクリーニングされた抗 Jra 抗体陽性の21歳未婚女性の一例を報告した。Jra 抗原は、1970年、Stroup と McClory により報告されて以来、日本人に稀に発見されている(頻

度0.08%)。妊娠又は輸血により抗体が産生され、抗体はクームス試験により検出される。本例のような稀な血液型も念頭に入れて輸血に際しては交叉適合試験による抗体スクリーニングが重要である。

2. 内頸動脈狭窄症に対し PTA(経皮的血管形成術)が奏功した1例

岡山大学脳神経外科 河田幸波 廣常信之 半田 明
徳永浩司 杉生憲志 中嶋裕之
大本 堯史

【目的】内頸動脈高度狭窄に対し PTA を施行し良好な結果を得たので報告する。

【症例】65歳男性、1995年5月、失語症、右上肢運動麻痺の TIA が出現、7月に突然、左眼が失明し、血管撮影にて内頸動脈の約90%高度狭窄を認めた。

【方法】まず径2.0mm、続いて径2.5mmのバルーンカテーテルで6気圧30秒の拡張を数回ずつ行い、ほぼ正常径まで拡張した。

【結果】PTA は脳血管の狭窄性病変に対し有効な治療法であると考えられた。

3. 病的骨折に対する Ender 釘の使用経験

岡山市立市民病院整形外科 清水弘毅 渡邊唯志 林 克彦
田中雅人 小浦 宏

転移性骨腫瘍の病的骨折および病的骨折予防のために Ender 釘を使用し、満足のいく結果がえられたので報告した。症例は11例(男性4例、女性7例)、年齢は平均69.5歳(33~89歳)で、予防的手術は1例であった。セメント併用が5例、

メッシュ併用が1例であった。術後、移動動作や除痛などの ADL の向上が9例にみられ、病的骨折に対する手術法として、手術侵襲が少ない Ender 釘の使用が有用であった。

4. 大腿骨骨幹部骨折術後の髓内釘破損の1例

岡山大学整形外科 宮地 健 佐藤 徹 井上 一
 笠岡第一病院整形外科 名越 充
 赤穂中央病院整形外科 小西池 泰三

我々は右大腿骨骨幹部骨折術後の円筒型髓内釘破損を経験した。症例は27歳女性。

Russell/Taylor 円筒型髓内釘(径10mm, 長さ340mm)を使用した。術後1年10ヶ月にて破損を生じた。破損断面に縞模様が、電顕像にさざ

波状の文様が見られた。力学的に強い円筒型髓内釘折損の原因は、釘の不適切な使用による金属疲労と考える。最近細い釘を使う傾向があるが、金属疲労による折損が生じる例もあることを報告する。

5. 中手骨短縮症に対する骨延長の経験

岡山大学整形外科 光吉 五朗 橋詰 博行 中塚 洋一
 三谷 茂 井上 一

中手骨短縮症に対し創外固定を用いた骨延長を行った。症例は14歳と26歳の女性であり、それぞれ右第3, 5及び左第3, 4, 5中手骨短縮症と右第4中手骨短縮症を認めた。Orthofix M-100 創外固定を用い、術中の一期的延長と術後

の断続的延長により、予定した骨延長が得られた。術後4週で創外固定を除去し、骨移植を追加した。延長距離は8~14mm(平均10.8mm)であった。機能的、整容的に良好な結果が得られた。

6. 当科における関節鏡症例の検討

岡山赤十字病院整形外科 寺尾 元延 新田 浩喜 加藤 彰浩
 小野 勝之
 鏡野町立病院 井上 博士

当科における独自のフローチャートに基づいて過去3年間の関節鏡症例218例228膝(男118例女100例)について検討した。受傷原因別に事故外傷, スポーツ外傷, 原因不明の3群に分け、受傷部位ではPF関節, 内側 外側半月板, ACL

に着目して考察したところ、スポーツ外傷の症例でACLの損傷が、原因不明の症例にPF関節及び半月板の損傷が多かった。又、高齢者には変性損傷を示した症例が多く認められた。

7. マイクロサージャリーによる組織移植

—血行障害を伴った四肢骨軟部組織再建—

川崎医科大学形成外科 光嶋 勲 森口 隆彦

68歳男性、脛骨破壊を伴う下腿の扁平上皮癌に対し広範切除とソケイ郭清したのち、脛骨欠損は血管柄付腸骨(10cm)、前脛骨筋群と皮膚欠損は神経付き大腿直筋と前外側大腿皮弁で再建

した。下腿の主動静脈の欠損は外側大腿回旋動静脈の下行枝(15cm)を前脛骨動静脈の欠損部にinterposeすることにより、患肢と移植組織の血行を再建することに成功した。

8. 皮下埋め込み型硬膜外投与システムを用いた癌性疼痛の1症例

岡山赤十字病院麻酔科 馬場 三和 中村 貴子 若林 隆信
 同外科 山田 真人 小野 監作
 同整形外科 加藤 彰浩 那須 正義

皮下埋め込み型硬膜外投与システムを用いて癌性疼痛管理を行い、在宅管理が可能となった1症例を経験したので報告する。症例は、70歳女性で、仙骨部の腫瘍摘出術後再発により痛みが増強しMS コンチンを1日160mgまで増量す

るも激痛がおさまらず当科を受診した。Quality of lifeを維持するために皮下埋め込み型硬膜外投与システムを設置し、塩酸モルヒネの持続投与を行い、良好な鎮痛が得られ、QOLが改善され在宅管理が可能となった。

9. 当科における食道表在癌の治療方針と成績

岡山大学第一外科 猶本 良夫 上川 康明 羽井 佐実
 岡林 孝弘 八木 孝仁 田中 紀章
 折田 薫三

近年食道表在癌は増加の傾向にあり、その臨床病理学的特徴も明らかとなりつつある。当科において1984年1月より1995年6月までに切除を行った食道癌症例数は181例のうち52例(28.7%)が表在癌であった。m癌とsm癌におけるリンパ節転移頻度は m_1 、 m_2 、 m_3 とも0%で、

sm_1 : 33.3%, sm_2 : 33.3%, sm_3 : 72.2%であった。 m_1 ~ m_2 の症例に対しては内視鏡的粘膜切除術(EMR)を行い、それより深達度の深いものに対しては標準手術を行っている。これまで20例にEMRを行い組織学的診断を行った。

10. 約3年の経過観察中、急速に増大を来した胃粘膜下腫瘍の1例

倉敷中央病院外科 増井 俊彦 高三 秀成

今回我々は3年間の経過観察中に急速に増大した胃粘膜下腫瘍の1例を経験したので報告する。症例は58歳男性、平成4年より健康診断にて内視鏡上直径2.8cmの胃粘膜下腫瘍を指摘され、以後、毎年経過を見られていたが、平成7

年に急速に粘膜の隆起が増大し、同時にCTおよびEUSにて腫瘍直径の増大を認められたため手術を施行した。粘膜下腫瘍の手術適応及び時期等について若干の文献的考察を加えて発表する。

11. 小腸脂肪腫の1例

川崎医科大学消化器外科 小沼 英史 木元 正利 伊木 勝道
 久保 添忠彦 竹尾 智行 村上 正和
 岩本 末治 今井 博之 山本 康久
 角田 司

59歳男性。主訴は胸部不快感。小腸造影で中部小腸に隆起性病変あり。手術では、トライツ靱帯から120cmの空腸に3×4cmの腫瘤があり、

空腸部分切除を施行。腫瘍は、黄色調の粘膜下腫瘤で、脂肪腫と診断した。術後症状は消失し経過観察中である。

12. 遠隔転移を来した大腸 sm 癌の 2 例

岡山済生会総合病院外科 松本 祐介 岡本 康久 赤在 義浩
木村 秀幸 大原 利憲 筒井 信正
広瀬 周平 片岡 和男

今回我々は早期大腸癌が肝転移、肺転移を来した症例をそれぞれ 1 例ずつ経験したので報告する。症例 1 は 69 歳の男性で、ポリペクトミー後 S 状結腸切除 (D₂) と S⁹ 肝転移に対し核出術を施行したが 16 ヶ月後多発性の肝、肺転移で死

亡。症例 2 は 59 歳男性で、直腸の sm 癌に対し局所切除後局所再発を認め直腸切断術 (D₂) を施行。3 年後胸部 X 線写真にて右上肺野に腫瘤影あり胸腔鏡下腫瘤摘出術を施行、直腸癌の転移と診断された。

13. 虫垂憩室穿孔の 1 例

岡山労災病院外科 中西 英博 福田 和馬 原田 英樹
小松 原正吉 間野 正之 木下 茂喜

症例は 24 歳女性、右下腹部痛を主訴に来院。右下腹部に圧痛、筋性防御があり、白血球増多 (12800)、CRP 上昇 (2.0) 認めたため、急性虫垂炎と診断し開腹した。開腹所見は盲腸周囲に膿汁貯留を認め虫垂切除を行った。病理組織学

的には、虫垂間膜側体部から末端にかけ多数の仮性憩室が存在し、内一つに膿貯留、穿孔が認められ虫垂憩室穿孔と診断された。術後の注腸検査では、結腸憩室の合併は認められなかった。

14. 肝右葉切除術前の門脈右枝塞栓術の功罪

岡山大学第一外科 斎藤 信也 津下 宏 浜崎 啓介
森 雅信 岡林 孝弘 八木 孝仁
猶本 良夫 折田 薫三

肝右葉切除を施行する場合、肝予備能に問題のある 16 症例に対し、術前に門脈右枝を塞栓し残肝 (左葉) の肥大化を図った試みの結果を報告する。塞栓による肝機能の悪化は見られず、肝左葉の容積は塞栓前 311ml だったものが塞栓後

418ml と有意に増大した。この方法は肝切除までの期間が伸びること等のデメリットもあるが、肝予備能の点からマージナルな症例に適応を拡大していく上で有用なものと考えられた。

15. 上腹部手術既往症例に対する腹腔鏡下胆嚢摘出術の検討

おおもと病院 岩本 充彦 石賀 信史 庄 達夫
石原 清宏 酒井 邦彦 岩藤 真治
山本 泰久

当院では過去 3 年半の間に、上腹部手術既往症例 13 例に腹腔鏡下胆嚢 (LSC) を施行している。全例に腹壁と大網に癒着がみられ、腹壁と大腸や小腸、胆嚢などと癒着しているものもあったが、open laparoscopy により気腹時の偶発

症を回避し、注意深い剝離操作を行うことで手術に成功した。我々は、上腹部手術既往症例に対しても、まず腹腔鏡下に癒着の程度を観察し、その上で LSC の適応を決定してもよいと考える。

16. 膵頭十二指腸切除術における膵胃吻合と胃内 pH

岡山大学第一外科 志摩 泰生 津下 宏 合地 明
森 雅信 稲垣 優 折田 薫三

膵胃吻合と胃内 pH の関係を、動物実験と臨床例で検討した。兎を用い、3群作成した。

I 群：胃温存・膵胃吻合，II 群：胃温存・膵腸吻合，III 群：胃切除・膵胃吻合。

膵吻合部周囲消化液の pH は、I 群は強酸，II 群は中性，III 群は強酸から中性を示した。膵断端の組織像は、I 群では硝子化変性し、線維組織におきかわっていたが、II 群・III 群では融解壊死を起こし、肉芽組織を形成していた。吻

合部周囲の pH が低いと、残腔に線維化を起こし、膵管を閉塞させる可能性が示唆された。当科で施行した PD 22 例中、術後の胃内 pH の最低値が 4 未満の症例が 15 例で、胃を切除しても胃内 pH が低値の症例が多かった。膵胃吻合においては、術後胃内 pH を測定し、低下例には、胃内 pH を上昇させることが膵外分泌能維持のために必要であると考えられた。

17. 肺芽細胞腫の 1 例

岡山大学第二外科 水谷 尚雄 東 俊孝 松本 英男
青江 基 伊達 洋至 安藤 陽夫
清水 信義

肺芽細胞腫は胎生 3 カ月頃の肺組織に類似する稀な肺原発悪性腫瘍である。今回我々は、高齢者肺芽細胞腫の一切除例を経験したので報告した。患者は 79 歳の男性で、胸部 X 線写真異常影にて発見された。術前の生検による組織診断

は確定せず、また、腫瘍が急速な増大を呈した為、手術施行した。腫瘍径は 8 cm を越え、胸壁への浸潤を認めたが、リンパ節転移は認めなかった。化学療法は施行せず、外来フォローアップ中である。

18. びまん性肺気腫 2 例に対する Volume Reduction Surgery

岡山大学第二外科 高嶋 成輝 伊達 洋至 山田 礼二郎
青江 基 安藤 陽夫 清水 信義

これまで外科的適応が無かったびまん性肺気腫に対し、気腫性変化の強い部分を切除し、横隔膜運動の改善を目的とした Volume Reduction Surgery を、2 例に施行したので報告する。

症例は 69 歳男性と 71 歳女性、いずれも呼吸困難を主訴として、来院した。手術により、1 秒量の著明な改善 (800ml → 1100ml, 460ml → 910ml) と自覚症状の軽減が見られた。

19. 巨大気腫性肺嚢胞症に対する胸腔鏡手術の検討

国立岡山病院呼吸器外科 重松 久之 東 良平 福原 哲治

当科で経験した 115 例の胸腔鏡手術のうち巨大気腫性肺嚢胞症の 5 症例について、術後合併症防止対策の面から検討した。5 症例中 3 例に術後肺気漏を生じ、うち 2 例に再手術を余儀なくされた。最近の 2 症例では、PGA フェルト(シ

ートタイプ)で縫合線上を被覆することにより合併症なく経過した。全例で呼吸機能の改善が得られ、手術手技の工夫により、巨大ブラに対する胸腔鏡手術は有用であると考えられた。

20. 頸部甲状腺癌に胸腔内甲状腺腫を合併した1手術例

岡山大学第二外科 松岡 欣也 土井原博義 安藤 陽夫
曾我 浩之 清水 信義

症例は、78歳男性、頸部腫瘍の精査にて入院。胸部 X-p にて気管の右方変位、頸部腫瘍を認める。CT、MRI にて甲状腺左葉内に石灰化を伴った腫瘍を認めると共に第4胸椎のレベルにまで達する縦隔内腫瘍を認めた。ABCにてClass

II。シンチでは、T_lにてhot、T_cにてcoldであった。頸部襟状切開にて左葉切除および縦隔内腫瘍摘出術を施行。この1手術例と過去13年間の6例について文献的考察を加えて報告。

21. 特異な経過をたどった腹部悪性神経鞘腫の1例

岡山赤十字病院外科 湯浅 一郎 川上 俊爾 大塚 康吉
小野 監作 古谷 四郎 辻 尚志
森山 重治 山田 真人 内藤 稔
池田 英二 小西 寿一郎
同病理部 国友 忠義

腫瘍摘出、8年後に局所再発および肝転移を認めた腸間膜の悪性神経鞘腫の1例を経験した。症例は53歳女性。昭和61年5月に腹部神経鞘腫を摘出した。平成6年6月に局所多発再発が認められ、再摘出術を施行した。肝転移も認めら

れ、PEIT 施行した。しかし急速に転移巣が拡がったためリビオドールーTAEを施行した所、転移巣の縮小が認められた。肝転移に対しては有用であると思われたので報告した。

22. 痔瘻癌の1例

国立岡山病院外科 福原 哲治 小橋 雄一 重松 久之
野村 修一 佐々木 澄治

痔瘻癌は比較的まれな疾患とされているが、今回我々は、痔瘻手術から11年を経て発症した痔瘻癌の1例を経験したので報告した。

病理学的には粘液腺癌で、肛門腺由来と考え

られた。

痔瘻罹病期間の長いものでは、新たに腫瘍を触知したり、コロイド様分泌物の排出を認めた場合、痔瘻の発生を疑う必要があると思われた。

23. 透析中に発生した腹直筋血腫の1例

川崎医科大学消化器外科 伊木 勝道 木元 生利 小沼 英史
久保 添忠彦 竹尾 智行 村上 正和
岩本 末治 今井 博之 山本 康久
角田 司

外傷などの明かな外力を伴わない非外力性腹直筋血腫は古くから知られているが、最近、抗凝固療法中に発生する本症の報告例が散見され

ている。われわれも透析導入後に腹直筋血腫を発症した症例を経験したので本邦報告例を集めて報告する。

24. SLEに合併した僧帽弁閉鎖不全症の1例

岡山大学心臓血管外科 高垣昌巳 青木 淳 柚木 継二
 入江博之 紀 幸一 菅原 英次
 佐野 俊二

SLEの経過中に僧帽弁閉鎖不全症の増悪をきたし、その臨床経過と病理組織所見より感染性心内膜炎を合併した Libmann-Sacks 型心内膜

炎を疑う1例を経験した。両者の鑑別は困難であったが、早期に人工弁置換術を行い、良好な成績を得た。

25. SVC症候群を来した心臓悪性腫瘍の1例

心臓病センター榊原病院心臓血管外科 打田俊司 畑 隆登 津島 義正
 松本 三明 濱 中 莊平 藤原 恒太郎
 黒木 慶一郎

65歳男性。心臓超音波エコー所見にて右心房内に腫瘍を認めた。SVC症候群出現した。腫瘍は両心房・SVCに及び体外循環下に切除し右房

を再建した。病理組織診断は、血管肉腫であった。心臓悪性腫瘍の姑息的外科的治療の意義という点に於いて悩んだ症例である。

26. 両側膝窩動脈捕捉症候群の1治験例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 菊川 大樹 稲田 洋 正木 久男
 遠藤 浩一 藤原 巍

今回我々は労作時左下腿痛と両足部冷感を主訴とした両側非閉塞性膝窩動脈捕捉症候群に対して両側腓腹筋切離術を施行して良好な結果を

得た症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

27. 当院における下肢静脈瘤硬化療法の実験 ——下肢静脈造影の意義——

御津町立金川病院外科 江田 泉 安原 正雄
 岡山大学心臓血管外科 青木 淳

当院では下肢静脈瘤硬化療法を行っており、その治療方針を決定するために、透視下で腹圧をかける下肢静脈造影を施行している。この検

査法により一次性下肢静脈瘤の成因診断は容易で、成因に応じた治療法の選択により良好な結果を得た。